

「標準放射線医学 第3版」

千葉大学教授 有 水 昇 編集
金沢大学教授 高 島 力

大阪大学教授
小 塚 隆 弘

X線撮影だけが生体の形態学的、機能的情報を描写する検査法であった時代から核医学、超音波、CT、MRIなど方法が多様化し、診断の精度が向上し、放射線診断学から発展的に画像診断学と総称され、臨床医学の中で大きな位置を占めるようになったことは今さら言うまでもないことである。放射線治療も同様に高エネルギー放射線が普遍的に用いられ、成績が向上し悪性腫瘍治療の重要な方法の1つとなった。更に、手術、化学療法、温熱療法などの組み合わせにより、一層よい生存率が得られているのが現状である。単に放射線の生体内線量分布を的確にするばかりでなく、腫瘍の組織学的特徴、発生部位、大きさ、進展度などについての十分な知識を持ったうえで、各種の治療法を適正に組み合わせなければよい成果が挙げられないので放射線腫瘍学と名を変えた。そのうえ、診断も治療も非常に早さで技術が進歩し続ける。このような時代に良い教科書を作ることは

大変難しいことと言わざるを得ない。

その観点から教科書のあるべき姿を考えてみると、診断なり、治療なりの技術のそれぞれについて正しく、わかりやすい説明と、人体の構造と機能および病態を画像学的に鮮明に、しかも、できれば三次元的に捉え、それを基本に病的パターンの解析から正しい診断を下す方法が示されるべきである。

更に、病巣の正確な局在と病理学的特徴から、それに最も適した治療の方法が述べられるべきであろう。教科書が上記のような方針で執筆されれば技術が進歩し、方法が多様化しても、それに追従しやすい柔軟な姿勢が養成されるのではないかと期待される。

本書は当初からそのような方針に従って執筆されたように見受けられる。技術の基本的な知識、画像の特徴から診断に最も早く、効率よく達するまでのアプローチが述べられている。しかも、単に初心者、学生だ

けでなく、卒後教育にも役立つような詳細な解説も加えられているのは有り難い。

教科書に有り勝ちな疾患ごとに記述する各論的な色彩よりも融通が効く記述法である。X線、核医学、超音波などの説明が並行して述べられているのも比較、あるいは方法の選択に便利である。以上のような構成は今度改善案が示された医師国家試験ガイドラインの方針ともよく適合するものである。新しいガイドラインでは放射線科の各論に大幅な変更がみられる。すなわち、疾病・症候群単位から画像を読む能力を問うことに重点が移されている。本書は、先に述べたように初版からそのような方針が貫かれており、ガイドラインに追従したというより、先取りをしたと言うべきであろう。

放射線医学は日進月歩の躍進を続けていて、その進歩について行くのはかなりの努力が必要である。教科書といえども例外ではない。今回の改訂に当たっては interventional radiology が新たに加えられ、MRI、USが更に充実した。放射線腫瘍学では新しいTNM分類に改められた。常に最新のものを盛るという編者の意気込みが窺われる。学生だけでなく、研修医、co-medical分野の方々にも利用価値の高い教科書として推奨したい。

B5判 844頁 図383 写真1404
原色図9 1988 ￥9,700 ㇔400

医学書院 刊